

多文化共生活動から生じたウェルビーイング - 東京都江東区の事例から -

中野 玲子

(日本語みらいラボ)

要約

本稿では、東京都江東区における「みんなで多文化交流 in 江東」の活動を取り上げ、ウェルビーイングという観点から考察する。活動が行われている団地では、日本人住民と外国人住民のコミュニケーションがとりづらい状況であった。そこで、「みんなで多文化交流 in 江東」は、多様な住民が対等に参加し、活動を通してコミュニケーションする場づくりを行った。中心メンバーは、違いがある他者とながり、相互に寛容性を醸成することで、「自分らしさ」「安心感」というウェルビーイングを得ていた。また、活動に参加した多様な住民の存在を知り、彼らが果たしている役割に気づくことで、相互共存するインタービーイングなつながりが顕在化し、中心メンバーのウェルビーイングとなったといえよう。また、活動からは、「相互共存するつながり」「違いへの寛容性」「つながりがもたらす安心感」がコミュニティ・ウェルビーイングの要素として挙げられた。

キーワード：ウェルビーイング 対等性 互惠性 インタービーイング コミュニティ・ウェルビーイング

1. はじめに

ウェルビーイングということばは、日本語では「よい状態」と言われることが多いが、1940年代に世界保健機構（WHO）が、健康の定義の中で使ったのが最初である [ウェルビーイング学会 2022: 2]。WHO では、健康を「肉体的にも、精神的にも、そして社会的にもすべてが満たされた状態にあること」 [日本 WHO 協会訳] と定義しており、ウェル

ビーイングは日本語で「満たされた状態」としている。肉体的に満たされた状態とは、身体で健康で活動できる状態を指す。精神的に満たされた状態とは、精神が健康であるかどうかに加え、心が豊かな状態も含む。そして、社会的に満たされた状態とは、福祉の充実などに加えて、社会的な出来事への関与や家庭・社会への役割参加を含む。また、他者との良好なつながりも社会的に満たされた状態の一例といえる。これらのウェルビーイングのうち、前野・前野〔2022: 73〕では、心が豊かな状態である幸福に寄与する因子として「やってみよう」「ありがとう」「なんとかなる」「ありのままに」という4因子を挙げている。4因子の1つである「ありがとう」に関しては、「つながりや感謝、あるいは利他性や思いやりを持つことが幸せである」〔前野・前野 2022: 73〕とされており、幸福には、他者との良好なつながりが関係していることが示唆されている。

幸福度と多様性の関係については、前野・前野〔2022: 126〕は、「幸せと創造性と多様性はまったく別の言葉のよう」であるが「関連し合っている」とし、「均一な友人を持つよりも多彩な友人を持つほうが幸せ」という研究結果を示している。ここからも、多様な人とのつながりが、上述したウェルビーイングに寄与する要因になると考えられる。日本では外国籍住民の増加に伴い、多様性を持つ多文化共生社会の実現が地域社会における課題となっている。そのような中、外国人住民と日本人住民がつながることで、個のウェルビーイングに加え、コミュニティ・ウェルビーイング¹の向上が期待できる。

多文化共生社会におけるコミュニティ・ウェルビーイングとは、個々の住民が個のウェルビーイングを向上させることに加えて、多様な住民同士がお互いの存在を知り、つながり、相手との違いに寛容的になることで個の持つ自分らしさを保持しながら、助け合い、安心して暮らすことのできるコミュニティの状態である。では、多文化共生社会に向けた活動は、個のウェルビーイングとコミュニティ・ウェルビーイングにどのように関係するのであろうか。

本稿は、東京都江東区における多文化共生活動をウェルビーイングという観点から考察することを目的とする。東京都江東区は、住民約54万人で、そのうち外国人住民が36,649人²を占める（令和5年11月1日現在）。外国人住民は全住民の6.8%を占め、その人数は出入国在留管理庁(2022)によると、東京都新宿区(41,228人)、埼玉県川口市(40,116人)、東京都江戸川区(39,555人)、東京都足立区(36,698人)に次いで、全国で5番目に多い市区町である³。団地が多い大島地区でも、外国にルーツのある住民数が増加し、日本人住民と外国にルーツのある住民間のコミュニケーション不足という問題を抱えている。そこ

で、相互にコミュニケーションをとり合い、多文化共生社会を共創するという地域の課題に向けて、「みんなで多文化交流 in 江東」⁴ という民間主体の任意団体が、日本人住民と外国にルーツのある住民双方による多文化共生活動を行っている。

「みんなで多文化交流 in 江東」では、2022 年度の活動報告を兼ね、中心メンバー9 名で「The Well-being Week2023-心と身体と社会のこれからを考える-」⁵ というイベントにて、プレゼンテーションを行った。このイベントは、基調講演・ワークショップ・プレゼンテーション・自由企画・特別企画で構成されており、様々な分野でのウェルビーイングに関する実践者や研究者が集い、日頃の実践報告や研究発表、ワークショップ等が行われた。多様なウェルビーイングについて参加者間で学び、体験し、対話する場となっている。筆者らのプレゼンテーションでは、江東区での活動を紹介するとともに、「どのようなきっかけでこの活動を始めたか」「どのような想いで関わっているのか」という観点から、メンバーの想いを話した。

本稿では、東京都江東区の「みんなで多文化交流 in 江東」が 2021 年の発足からこれまで実施した活動が、個のウェルビーイングとコミュニティ・ウェルビーイングにどのように関係したのかを考察する。考察は、The Well-being Week 2023 のプレゼンテーションにおける中心メンバーの語り⁶を基に行う。

2. 中心メンバーの位置づけ

The Well-being Week 2023 に参加した中心メンバー9 名は、「みんなで多文化交流 in 江東」の会長・副会長・事務局長・会計などの役割を持つ者で、会の立ち上げに尽力した者・会の運営に中心的に関わる者・2022 年のイベントに主担当として関わった者である。この 9 名が 2022 年の活動の振り返りの場として、The Well-being Week2023 のプレゼンテーションに参加した。プレゼンテーションは、2023 年 3 月 19 日（日）10 時から約 1 時間、オンラインにて行い、G(筆者)が活動の概要を紹介した後、I を司会として、残りのメンバー7 名が会の活動に関して発言をした。図 1 に、中心メンバー9 名と当会活動の位置関係を示す。

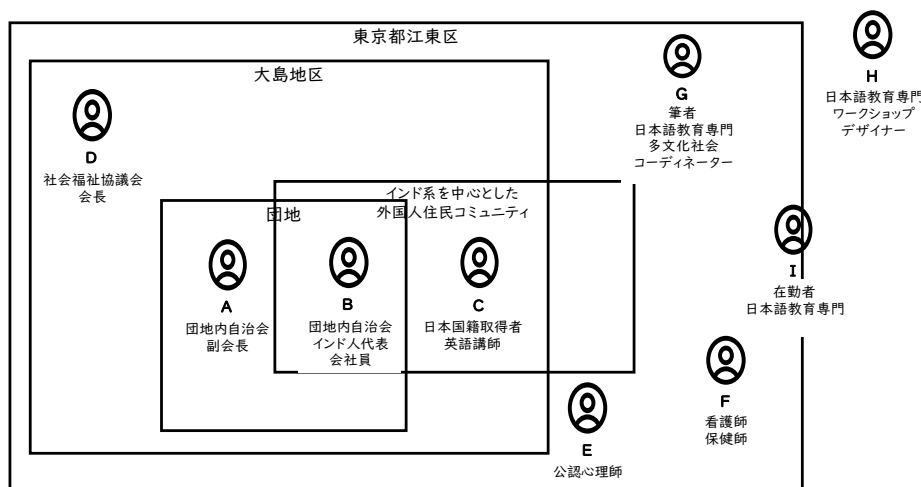


図1 中心メンバー9名と当会活動の位置関係

中心メンバー9名のうち、外国にルーツのある者はBとCであり、ともに、インド人コミュニティのゲートパーソンである。Bは団地自治会のインド人代表を務め、日本人住民とインド人住民をつなぐパイプ役となっている。また、Cは日本人とのつながりに加え、メキシコ人、ベトナム人、スリランカ人等その他外国人住民とのつながりも持ち、多様性のある人脈を持つ。その他のメンバーは日本人住民で、異なる専門性を持ち、それぞれの視点からこの活動に取り組んでいる。特に、会の立ち上げの中心となったAは団地内自治会副会長、Dは江東区社会福祉協議会会長と、地域においても役職を持つメンバーが他のメンバーと対等に活動しているという点がこの会の特徴といえる。このほかのメンバーは、Eは臨床心理学、Fは看護学、Gは多文化共生と日本語教育、Hはワークショップデザインと日本語教育、Iは日本語教育という多様な専門を持つ。多角的に本活動を検討することができるため、筆者と司会者を除く上記7名のThe Well-being Week 2023での発言を用いて、活動を考察することにする。

3. 「みんなで多文化交流 in 江東」の発足

3-1. 発足のきっかけ

江東区大島にある団地は、日本人住民が高齢化している一方、外国にルーツがある若い世帯（特にインド系住民が多い）が多く見られる。この団地にインド系住民が増え始めたのは10年以上前であるが、インド系住民が当該団地を選ぶ理由の1つとして、近隣のイ

ンディアンインターナショナルスクールとインターナショナルスクールの存在が挙げられる。両校とも英語での教育を実施しており、インド系住民の子弟のうち大多数は両校のいずれかで学ぶため、日本で長く生活しても、日本語が初級レベル、またはほぼ話せないという子弟が多い。また、両親も日本人住民との交流はほぼなく、多くのインド系住民はインド人コミュニティの中で暮らしている。そのため、この団地では、日本人住民と外国にルーツのある住民の間でのコミュニケーションが取れておらず、夜間の騒音やゴミ出しに関する問題が日本人住民側から挙げられていた。さらに、団地の日本人住民の高齢化に伴い、災害時への不安の声も日本人住民から挙がっていた。

そこで、団地自治会では、防災時の弱体化という問題に取り組むために、まずは、防災に関心がある住民を中心に、高齢化した日本人住民と外国にルーツがある若い住民を主体とした活動を考えた（A 発言）。また、「団地だけで考えても解決できない」（A 発言）と考え、地域の町内会連合会にも呼び掛けることとした。しかし、外国にルーツを持つ住民とのコミュニケーション不足が原因で、思うように活動は進まなかった。

コミュニケーション不足に気づいた住民は、まずは「日常生活において彼らがどれだけ困っているか」「どういうことが彼らにとって日常生活の中で楽しさがあるのか」（D 発言）を、外国にルーツのある住民に聞いてみようということになった。それを機に住民が対話をする場として「みんなで多文化交流 in 江東」の活動が開始されたのである。

「みんなで多文化交流 in 江東」では、発足当初から、日本人住民と外国にルーツのある住民の多様性と対等性を確保し、両者が協働して活動を進めるための工夫をした。例えば、初回の会合には、決まったメンバーだけではなく、団地住民で興味がある人なら誰でも対等に参加できるよう、その場での参加呼び掛けから開始した。これについて、E は「本当に誰でも受け入れる、多様性。外国の方だけではなく、日本人の多様性」もある、と述べている。日本人メンバーにも多様性があつたため、国籍・文化・言語等に関する多様性ではなく、一人ひとりの「個」の多様性を重視する活動になったと考えられる。この初回の会合では、参加者全員の対話を通して、会の名称⁷と会の理念⁸を決定した。このように、きっかけは、防災時における地域の弱体化への懸念であつたが、まずは多様な住民が同じ場に対等に参加し、対話するということから、当会の活動は開始されたのである。

この発足時の会合は、2 回目以降は「全体会」と名称を変更し、毎月第 1 日曜日午前に継続して開催している。



写真 1 全体会における討論と発表の様子

全体会は、「どういう形になるかわからない」が「外国籍の方の意見」(D 発言)を聞き、日本人側の意見と合わせながら進めている。この全体会について、Bは「自分のアイデアをシェアできる」場であり、「みんなの意見もちちゃんと聞いて」そのうえで「自分のやりたいことができる」場だということが、「魅力」だと述べている。このように、全体会は対等に対話を行い、双方の意見に寛容性を持って進めることで、自分らしさも確保できる場となっている。

3-2. 課題設定の過程

「みんなで多文化交流 in 江東」が設定した課題は互恵性を備えている。そして、その課題達成に向けて、それぞれのメンバーは対等な関係で協働している。では、どのようにして互恵性を持つ課題を共有し、対等に協働できる場を設けたのであろうか。

江東区の団地で、当初挙げられた防災時における地域の弱体化という問題は、日本人住民側からの提起であり、外国にルーツを持つ住民から挙げたものではない。たしかに防災時の地域の強化は全住民にとって重要な互恵性のある課題といえよう。しかし、日本人住民側から挙げた一方的な課題設定では、外国にルーツを持つ住民の考えは反映されておらず、課題を共有しているとはいえない。そのため、互恵性もなく、対等に協働できる場を設けることも困難であろう。

そこで、まずは 3-1 で述べたように、住民同士でコミュニケーションをとる場を作ることとした。まず、活動に興味を持った住民が集まった場で、スポーツ・祭り・料理など、それぞれが興味ある活動ごとにグループに別れ、各グループで「自分たちにできる活動」

を、対話を通して模索した。そして、それらの活動の内容を話し合ったり、計画・実施したりする過程で、お互いの違いに気づき、違いに対しては互いに寛容性を持ちつつ、コミュニケーションを継続した。それらの対話や活動を通して、考えを交換し合う場の重要性に気づき、「コミュニケーションの場を作る」という課題設定を共有していった。このように、対話と活動を行う中で、課題を共有したことが、対等性と互惠性につながったと考えられる。

さらに、対話を行う過程で、「外国の人たちは、日本人がなかなか笑顔を見せてくれない、自分たちを受け入れてくれない、そういうことがあるとわかった」(D 発言) というように、受け入れ側の日本人住民の抱える問題に気づいた。外国にルーツのある住民によるゴミ出しや騒音に問題を感じていた日本人住民であったが、それらに関しての課題を一方的に押し付けるのではなく、相手は何を問題と考えているのかを探ろうとしたことが対等性と互惠性につながったのである。

このように「みんなで多文化交流 in 江東」では全体会という場を設け、それまでコミュニケーションが取れなかった日本人住民と外国にルーツのある住民間の異なる考えや想いを聞き合う機会を作り、対話と活動に繋げ、課題を共有した。そして、様々な活動に対等に取り組む過程で、顕在化した違いに関して相互に持つべき寛容性を身に付けた。そして、自分とは違う他者の言動に寛容的に接する過程を通して、相互に「あなたらしさを大切にしよう」態度を醸成した。また課題に互惠性があることで、「感謝し合うというつながり」も生じた。「ありのままに」「ありがとう」という幸せの因子を個が持つだけでなく、「あなたらしさを大切にしよう」「感謝し合う」という相互の幸せに関係する要素が生まれた点が特徴と考えられる。次章では、これまでに実施した活動とそれらの活動で見られた中心メンバーの具体的なウェルビーイングについて考察する。

4. 2022 年の活動と中心メンバーのウェルビーイング

4-1. クリケットと少年野球体験会

クリケットと少年野球体験会は、2022 年 3 月 20 日に、江東区内の野球場で開催された。クリケットはインドで人気が高いスポーツであり、江東区のインド人コミュニティもクリケットチームを持ち、練習や試合などを活発に行っている。しかし、クリケットを楽しむ日本人住民はほぼいないため、「日本のコミュニティにクリケットを紹介」(B 発言) したい、「日本人と一緒にクリケットの楽しさと喜びを共有」したい[みんなで多文化交流

in 江東 2022: 10] という B の想いから実現した活動であった。日本人参加者のほとんどがクリケットを体験したことがない、または知らないという状態だったため、当日はインド人クリケットチームのメンバーから、クリケットのルール・バッドの振り方・ボールの投げ方などの説明が日本語で行われた。その後 2 チームに分かれ、インド人と日本人の混合チームでクリケットの試合を行った。参加したほとんどの日本人にとって「聞いたことはあるけど、やったことがないスポーツ」であったが、インド人クリケットチームのメンバーの協力で楽しい時間を過ごすことができた。



写真 2 クリケットと少年野球体験会当日の様子

この体験会における「みんなで多文化交流 in 江東」らしさは、インドで人気のスポーツ「クリケット」と、日本で人気のスポーツ「野球」を同じ場所で楽しめるように工夫したという点である。体験会が開催されたのは地域の野球場だったが、体験会当日は野球場の半分を地元の少年野球が使用し、活動する予定となっていた。そこで、インドの子どもたちに野球を体験させたいと申し入れ、当日は野球に興味を持ったインド人子弟が、野球を学び、キャッチボールを楽しむ場ともなったのである。子ども同士は、言語的な問題から直接交わることはできなかった。しかし、大人が通訳をすることで、コーチの指導を受けることができ、同じ野球場で野球をする時間を一緒に過ごすという経験につながった。B は「インドでは野球は人気なスポーツではない」が、両方のスポーツができたことで「お互いにいい時間」になったと述べた。

日本では野球とサッカー等が人気のあるスポーツであるが、インドでは、クリケットが国民的スポーツである。クリケットは、インドの他、英国・豪州などの英連邦諸国で盛んに行われ、競技人口はサッカーについて世界第 2 位である⁹⁾。B によると、インド国内では野球は全く人気がないものの、日本在住インド人は野球を日頃テレビなどで見る機会が

あり、興味を持つ者も少なからずいるという。体験会は子どものみが対象であったため、見ていただけの B であったが、自身も野球をしてみたいと思っており、クリケットと野球は似ているスポーツだから、野球もすぐに上手くなるだろうと考えている。また、最近ではクリケットに興味を持つ日本の若者が増えており、日本のクリケットチームに在籍する若者の多くは野球経験者なのだと語った¹⁰。このように、親和性があるため、日本では野球経験者がクリケット競技に挑戦するというケースも出てはいるものの、体験会ではクリケットバッドの実物を初めて見る日本人がほとんどであった。またインド人子弟も野球に興味はあっても体験したことはなく、野球のグローブを初めて手に取る子どもたちが多かった。このように、体験会を通して自分たちの国では人気のスポーツが、相手にとってはほぼ馴染みのないスポーツであるということをお互いが知る機会にもなった。

以上のように、クリケットと少年野球体験会では、言語的な違いを顕在化することなく、クリケットと野球を同じ場所で楽しみ、お互いを知る機会となるように工夫した。その中から、特に子どもの野球体験を通し、B は団地内の住民同士がコミュニケーションを取れなかったのは言葉の問題ではなかったことに気づいた。B は、「お互いにつながっている限り、言葉は問題ではない」と述べ、「言葉の壁なし」に「どのように外国人住民と日本人住民がつながることができるか」をこの会の活動として考えていきたいと述べている。このように、クリケットと少年野球体験会は、言葉の壁の存在が住民間のコミュニケーションを阻害したのではなく、「つながる場」の欠如がコミュニケーションを阻害していたということを学ぶ機会になったといえる。

なお、B は自身のこの活動へのかかわり方について、「自分のやり方で貢献することができた」と述べている。計画から実行まで B を中心にインド人クリケットチームが行い、準備や実施の過程で日本人住民が自分たちとは異なる考えや行動に寛容的に接し、B らによるイベントの進め方を受容した。インド人クリケットチームの進め方が受容された結果、B が「自分らしさ」を感じることができたのであろう。

4-2. カルチャル・エクスチェンジ

カルチャル・エクスチェンジは、2022 年 4 月から定期的に毎月 1 回、2 時間程度開催している。この活動のリーダーは、C と G である。毎回、団地の集会所¹¹に 10~20 名程度集まり、英語と日本語¹²を使う活動を通して、言語だけではなく、参加者個人の考え方・習慣・文化などを交換する活動を行っている。この活動のきっかけは、日本人メンバ

一による「子どもが学校で英語を学んでも、使う場所がないので上達しない」という全体会での発言に対し、その場で、インド人メンバーから「インド人も日本語を学び、JLPT¹³をとるが、実際に日本人と話す機会がない」という問題が挙げられたことである。そこで、日本語と英語を用いて交流しながら、言語を学び合い、相互理解を深めるという目標を掲げ、活動を開始した。

カルチュラル・エクスチェンジでは、日本語を話せる者が話せない者を支援し、英語を話せる者が話せない者の支援をする。このようにして、双方で言語能力を補完し合い、互惠性を確保している。また、活動を通して参加者一人ひとりが持つ思考・習慣・文化などの多様性も交換できるように工夫をしている。カルチュラル・エクスチェンジの場を通して、参加者は言語的な違いや言語能力不足があっても、対話が可能であることを体験する。

2023年1月には、グループに分かれてみそ汁を作るという活動を行った。みそ汁の具材を決め、買い出しに行き、一緒に作るという活動のプロセスで様々な対話が生じた。宗教による食制限・好き嫌い・予算などが関係するみそ汁具材の選定に関する対話が、相手の未知の部分を知るきっかけとなった。例えば、日本人参加者にとっては馴染みの薄いベジタリアンについて理解するきっかけとなり、外国にルーツのある参加者にとっては馴染みの薄い日本独特の食材について学ぶきっかけとなった。それぞれのグループの参加者の言語能力に応じて、使われる英語と日本語の様相は異なったが、どのグループも言語能力の不足を補い合いながら対話を進め、お互いの未知の部分を発見し合い、そして伝え合うことで理解を深めていた。



写真3 みそ汁の会当日の様子

このように、前節で紹介したクリケットと少年野球体験会とは異なり、カルチュラル・

エクスチェンジの参加者は、お互いの不足を助け合う・未知の部分を知るという過程を通して、言語的な違いや言語能力不足、または文化的違いなどが顕在化しても、相互理解に向けた対話は可能であるという体験をする。

C は、カルチュラル・エクスチェンジを主催することで、多様な住民と対話をし、コミュニティ内につながりを増やした。「異国の地で生活していて、日本社会との接点がほぼないと、孤独に悩まされ」るが、この活動を通じて「地域社会とつながる」ことで「何よりの幸せを手に入れた」と思うと C は語った。C は、日本人社会と自らがつながるだけではなく、仕事を通して自らとは異なる国にルーツを持つ外国人住民ともつながりを有し、助け合って生活している。C にとって、多様性のある住民のことを知り、つながり、助け合うことが、この地での安心感となっているのである。なお、高齢の日本人参加者にとっても、多様な住民とつながることで、暮らしやすさにつながり、安心感も高まっていると考えられる。このように、カルチュラル・エクスチェンジでは、多様なメンバー間で、言語に多少の不足があっても、相手の未知の部分を知り、つながることができるという「安心感」が感じられている。

4-3. 中心メンバーが感じたウェルビーイング

中心メンバーは活動を通して、「自分らしさ」が出せると感じ、他者を知り、つながることで「安心感」を感じていた。では「自分らしさ」や「安心感」はウェルビーイングとどのようにつながるのであろうか。

クリケットと少年野球体験会においては、「自分らしさ」が出せたことが嬉しかったと B は述べた。B の「自分らしさ」が出せたという喜びは、違いを有する者同士のつながりにおいて、他者が B との違いに寛容的になり、許容したために生じたものである。多様性の乏しい集団内では、他者との違いは少なく、したがって本人が「自分らしさ」を感じることも難しいであろう。B の「自分らしさ」が出せたという精神的に満たされた状態は、違いを有する他者の存在によって生じる。また、その他者にありのままに受け入れられるという社会的に満たされた状態が、B のウェルビーイングにつながったといえよう。

カルチュラル・エクスチェンジでは、違いがあっても理解し合い、つながることができる、ということに C は安心感を得ていた。言語や文化的な違いがあると、コミュニケーションがとりづらくなる。その結果、他者を知るきっかけを持てず、つながりを感じにくくなり、その地での生活に不安を覚えるようになる。しかし、つながりにくいからこそ、知

るきっかけを持ち、つながりを作ると社会的に満たされた状態となり、Cは安心感という精神的に満たされた状態を得ていたと考えられる。

これらの活動で見られたつながりについて、Fは精神的・社会的なウェルビーイングだけではなく、肉体的なウェルビーイングにも寄与していると述べた。「誰かとつながっていて、気にかけてもらう」という関係では、肉体の健康や活動状況の確認を相互に行うことが多い。このようなつながりが、肉体の健康に寄与していると言うのである。そして、つながりが持続すると、「何か災害が起こったとき、あの人大丈夫かしらって思える、そういう感覚」(F発言)を生じさせる。また、「みんなで多文化交流 in 江東」には、高齢の日本人メンバーがおり、彼らの健康を気遣う会話が頻繁にかわされている。このように会でのつながりを通して、メンバーの身体・健康維持、すなわち肉体的に満たされた状態につながっているとFは考えている。

中心メンバーは活動を通して、自分らしさを出せる場を得る、また相手を知り、つながることで安心するという、精神的・社会的なウェルビーイングを得ていた。また、互いの健康を気にかけることで、相互に健康を維持し、肉体的にもウェルビーイングであった。これらのウェルビーイングの基盤となったのが、違いを有する他者の存在であるといえよう。

5. つながりからコミュニティ・ウェルビーイングへ

5-1. 相互共存するつながりへの気づき

「みんなで多文化交流 in 江東」の活動を通して、中心メンバーたちは、言語や文化的な違いがあっても、対等で互惠的な場さえあれば、自分と違う他者とつながることができると感じた。では、このつながりはなぜ生じたのであろうか。

ティク・ナット・ハン [2011: 119] は、「私たちが、あるいは、何かのものが、ただ自分だけで存在するということはありません」「私たちは、ほかのすべてのものとともに存在している」と述べている。このように、相互にどこかでつながり、助け合い、共存している状態を、ティク・ナット・ハン「インタービーイング (相互共存)」[2011: 118] ということばを用いて説明している。インタービーイングとは、何かまたは誰かが存在する限り、それだけで存在することはなく、必ず他のものと相互共存しているという状態である。

江東区大島の団地でも、インタービーイングは存在している。日本人住民と外国にルー

ツのある住民間で、言語・習慣・世代等が異なるため、コミュニケーションが取りづらく、団地内におけるつながりが感じられない状態であった。しかし、つながりがないと感じられていただけで、潜在的にインタービーイングなつながりは存在している。例えば、クリケットと少年野球体験会には様々な人の存在と役割参加によるつながりが必要であった。クリケットを紹介したいと思った B、クリケットを教えに来てくれたクリケットチームのインド人メンバー、クリケットに興味を持った日本人住民、少年野球の指導者、野球を子どもたちにさせたいと思った大人たち、野球を楽しんだ子どもたちなど、その場にいた全員が、会の成立に必要な存在であり、様々な役割を持って参加していた。参加者はお互いの役割遂行のために意識的または無意識的に助け合い、野球場に共存していたということから、この会は相互共存するつながりを有していたと筆者は考える。B がつながるために言葉の壁は関係がないと発言したのは、この会を成立させたのが多様な人の存在と役割参加であり、会を媒介に相互共存するつながりを感じたからであろう。

「みんなで多文化交流 in 江東」の様々な活動を通して、住民同士に新たなつながりが生じたのではない。コミュニケーションが取れないという理由で、それまでは知ろうとしていなかった存在に意識が向き、お互いの役割参加のために協働したことで、潜在的に有していた相互共存するつながりが顕在化したのである。このように、活動を重ねることで、団地内や周辺が多様な住民の存在と彼らが果たしている役割に気づいていったことが、住民同士の相互共存するつながりを顕在化させたといえる。

5-2. コミュニティ・ウェルビーイングへ向けて

本節では江東区大島における多文化共生活動を基に、コミュニティ・ウェルビーイングについて考察する。コミュニティ・ウェルビーイングが生じるには、どのような工夫が求められるのか、また構成員の個のウェルビーイングとどのように関わるのか、以下に述べる。

まず、コミュニティ・ウェルビーイングが生じる場には、コミュニティの構成員の関係に「対等性」と「互惠性」が不可欠であると考えられる。「みんなで多文化交流 in 江東」では、活動課題を設定する段階から、メンバー間の「対等性」を保持する工夫をした。そして、「互惠性」のある課題をメンバー間で共有した。このように、コミュニティの構成員が、どのようなコミュニティにしたいと考えているのか対話をし、「互惠性」のある課題を共有することが重要である。また、国籍や世代に関わらず、コミュニティに全構成員が役

割参加をしていることに気づくための工夫が求められる。

次に、前章までに論じた「みんなで多文化交流 in 江東」の活動が個のウェルビーイングとコミュニティ・ウェルビーイングにどのように関わっているのか考察する。図2は、「みんなで多文化交流 in 江東」の活動を通して生じた違いのある他者とのつながりが基盤となり、個のウェルビーイングとコミュニティ・ウェルビーイングにつながっている様子を示したものである。活動を通して違いのある他者の存在を知り、つながることで個のウェルビーイングは生じる。なお、個のウェルビーイングを得ることで、違いのある他者とのつながりがさらに広がり、個のウェルビーイングをより一層高めるという相互作用的な効果も持つと筆者は考える。また、つながりを基盤に生じた個のウェルビーイングは、コミュニティ・ウェルビーイングの向上に寄与し、自分らしく安心して暮らせる町づくりにつながると考えられる。

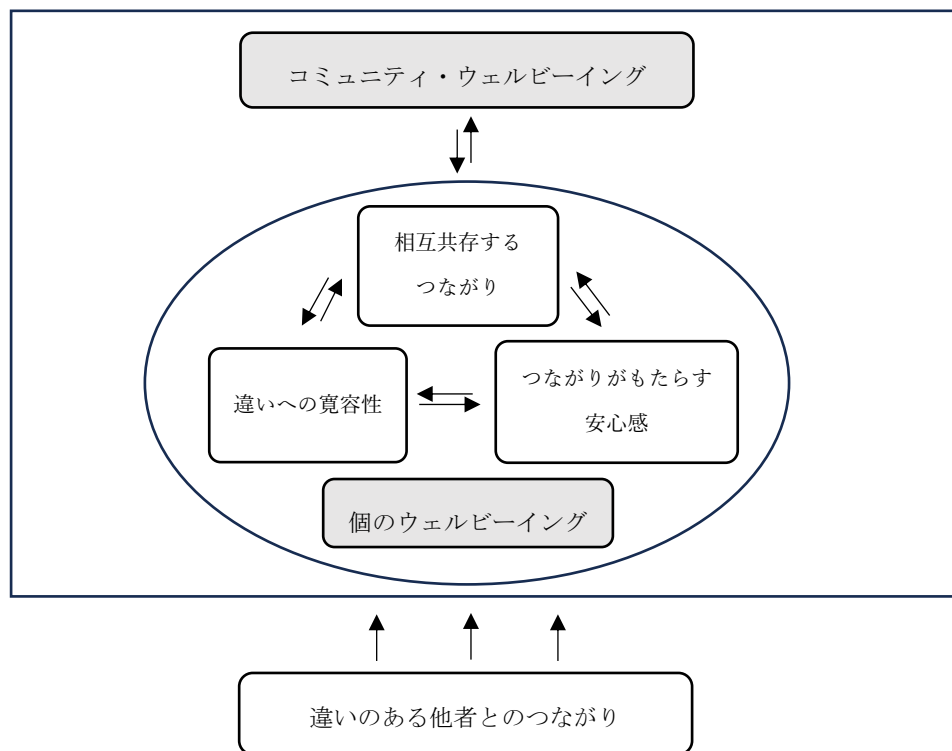


図2 多文化共生活動を基盤に生じた個のウェルビーイングとコミュニティ・ウェルビーイング

コミュニティ・ウェルビーイングにつながる1つ目の要素は、相互共存するつながりである。「みんなで多文化交流 in 江東」では多様なメンバーが、それぞれの強みや専門性を

生かしながら、助け合い、役割参加をした。また、様々なイベントの実施を通して、それらに参加した多様な住民の存在にも意識が向き、参加した住民の役割に気づくことで、相互共存するつながりを有する仲間であると感じるようになった。よって、個々の構成員の存在と果たす役割への気づき、そして助け合うことで気づく相互共存するつながりがコミュニティ・ウェルビーイングの基礎的な要素になるといえよう。

2つ目の要素は、自分と他者との違いへの寛容性である。「みんなで多文化交流 in 江東」の活動過程では、自分と他者の違いから摩擦や軋轢が生じる場面もあったが、対等な関係性を維持し、活動を継続するために、違いに対する寛容性を自然に醸成していった。全構成員が自分らしく存在し、さらに自分らしく役割参加するために、他者に対する寛容性を相互に醸成することは、コミュニティ・ウェルビーイングの重要な要素であるといえよう。

3つ目の要素は、つながりがもたらす安心感である。「みんなで多文化交流 in 江東」では、多様な住民を知り、つながることで安心感が生じた。このように、構成員同士が知り合い、つながりを持つことにより、そのコミュニティでの日常を安心なものにする。特に、多様性のあるコミュニティにおいては、違いがある未知の構成員に対して、不安が生じることもある。ゆえに、違いのある構成員同士がつながり、相手の未知の部分が減少することで、より大きな安心感につながるのであろう。多様な構成員が存在する多文化共生社会でのコミュニティ・ウェルビーイングには、つながりがもたらす安心感も不可欠な要素といえよう。

以上のことから、江東区の多文化共生活動からは、コミュニティ・ウェルビーイングにつながる3つの要素を挙げることができる。まず、コミュニティの構成員として全構成員が必要な存在であり、何等かの役割参加をしているという相互共存的なつながりに気づくことである。また、構成員間の未知な部分を知り、知ることによって生じた違いには寛容性を持つことである。さらに、お互いを知り、つながることでもたらされる安心感もコミュニティ・ウェルビーイングに必要な要素として挙げられる。

6. おわりに

本稿では、東京都江東区の任意団体「みんなで多文化交流 in 江東」の活動を、中心メンバーの語りからウェルビーイングという観点で考察した。

江東区大島の団地では、住民間のコミュニケーション不足による防災時の地域の弱体化が懸念されていた。そこで、日本人住民と外国にルーツのある住民同士が、互惠性のある

課題設定をし、対等な関係で「コミュニケーションの場を作る」という課題に向かった。

課題達成の過程には多様な住民が参加し、様々な役割を果たした。そして、多様な住民の存在と役割参加が、「相互共存するつながり」を気づかせた。また、活動の過程で生じた他者との「違いへの寛容性」を醸成することで、「つながりがもたらす安心感」を得た。このようにして、「みんなで多文化交流 in 江東」では、活動を通して得たつながりが個のウェルビーイング、さらにコミュニティ・ウェルビーイング向上に寄与していると考えられる。

「みんなで多文化交流 in 江東」は活動 3 年目に入った。今後も、全ての住民が安心して自分らしく暮らせる多文化共生社会はどのような社会なのか住民同士で対話を行い、多様な住民をコミュニティの対等な仲間として受入れ、相互共存する関係であることに気づくことができるような活動を続けていきたい。

[注]

1. Wiseman ら(2008)は、「Community Wellbeing」の定義を試みている。中山(2020)では、日本語表記を「コミュニティ・ウェルビーイング」とし、「個人や家族、地域社会が特定した社会的、経済的、環境的、文化的、政治的条件の組み合わせであり、地域住民の幸せや健康にとって不可欠である」と訳している。本稿では、多文化共生社会における「コミュニティ・ウェルビーイング」に、どのような要素が求められているのかを、江東区の事例を基に考察を行う。

2. 東京都江東区 HP より

<https://www.city.koto.lg.jp/060305/kuse/profile/shokai/documents/20231101.pdf>

(2023 年 11 月 9 日閲覧)

3. 出入国在留管理庁 在留外国人統計 2022 年 12 月末「在留外国人総数上位 100 市区町」

<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250012&tstat=000001018034&cycle=1&year=20220&month=24101212&tclass1=000001060399>(2023 年 11 月 9 日閲覧)

4. 2021 年発足時は、活動を江東区大島に限定していたため「みんなで多文化交流 in 大島」という名称であった。2023 年 7 月に「みんなで多文化交流 in 江東」と名称を変更した。区内外における他団体の活動との連携、多文化共生社会の広がりを視野にいたした変更である。

5. 大会 HP <https://well-being-week.com/>(2023 年 7 月 20 日閲覧)

6. 2023 年 3 月 19 日(日)「The Well-being Week2023-心と身体と社会のこれからを考える-」でのプレゼンテーションにおけるコアメンバーの発言を録画し、後日筆者が文字化した。考察には、この文字化データを主に使用した。

7. 「みんなで多文化交流 in 大島」という旧名称決定にあたり、「多文化交流」など何をしているかわかりやすい表現をいれる、「大島」地域が江東区内でも認知度が低いため場所を明記する、多くの人が読めるようにひらがなをいれる、特にインド人住民に向けて英

語表記を併記する、など数々の意見が上がった。

8.「人は誰でも幸せに生きたい。共に暮らす地域の人々が声を掛け合い、手を取り合い、助け合い、みんな笑顔で『ありがとう』の社会を作る」

9.日本クリケット協会 HP より <https://cricket.or.jp/about-cricket> (11月11日閲覧)

10.ここでの B の発言は The Well-being Week2023 のプレゼンテーション内のものではない。野球について、後日改めて行った筆者の質問に、B が回答した内容を取りあげている。

11.例外として、2023年6月は、江東区の堅川河川敷公園で行われたマルシェにランゲージ・エクスチェンジのグループで出展し、その場で活動を行った。

12.2023年10月現在は、英語と日本語のみで活動を行っているが、今後は参加者の多様化に伴い、他言語も加えた活動を検討していきたい。

13.日本語能力検定試験のこと。

[文献]

ウェルビーイング学会, 2022, 「ウェルビーイングレポート日本版 2022」 https://society-of-wellbeing.jp/wp/wp-content/uploads/2022/09/Well-Being_report2022.pdf (2023年7月9日閲覧)

神吉宇一・中野玲子, 2022, 「多様な住民の協働による地域日本語活動の実践」『2022年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会:291-295.

公益社団法人日本 WHO 協会「世界保健機関憲章前文 (日本 WHO 協会仮訳)」
<https://japan-who.or.jp/> (2023年8月31日閲覧)

ティク・ナット・ハン著, 池田久代訳, 2011, 『微笑みを生きる〈気づき〉の瞑想と実践』春秋社

中山直子, 2020, 「コミュニティ・ウェルビーイングと保健師」『日建教誌』28(1):3-4.

前野隆司, 2013, 『幸せのメカニズム』講談社現代新書

前野隆司・前野マドカ, 2022, 『ウェルビーイング』日本経済新聞出版

みんなで多文化交流 in 江東, 2022, 『2022年度年次報告書』みんなで多文化交流 in 江東

Wiseman, John・Brasher, Kathleen, 2008 “Community Wellbeing in an Unwell World: Trends, Challenges, and Possibilities”, *Journal of Public Health Policy*. 29. 353-366.